

第283回くらしの植物苑観察会 令和4年10月22日（土）

## 「魔除けの植物文化」

辻 誠一郎（東京大学名誉教授）

魔除けとは、自分やムラ・集落、都市や地域、さらには民族や国家にとって悪しき物事を追い払い、多くの場合には同時に健康・安全、あるいは平安・平和をもたらす物事のことであるといってもいいでしょう。その物事は実に多様で、人によっても、集落によっても、地域によっても異なるのがふつうですが、広く共通する物事も少なくありません。また、もともとは魔除けとされてきたものが、時代とともに、社会の変化とともに質的に変化し、魔除けの目的も多様化しているように思えます。魔除けの役割を果たしてきた植物は実に多様で、利用の仕方もさまざまです。そんな魔除けの植物文化を垣間見てみることにしましょう。

### 長寿と生命力の象徴：巨樹・巨木

寺院や神社にはたいてい巨樹・巨木のご神木が参道や本堂・本殿の脇にそそり立っているのはよくある景観です。寺院にも神社にも共通してあるものも少なくなく、これは神仏習合の証といってもよいものです。その代表的なものが、杉（スギ）、樺・槻（ケヤキ・ツキ）、楠・樟（クスノキ）で、全国の巨樹・巨木の1位から3位にランキングされています。このほかに檜（ヒノキ）、樅（モミ）、銀杏（イチョウ）、高野槇（コウヤマキ）など、さらに奥山に入ると栃木（トチノキ）や山毛櫨（ブナ）などもあります。樹齢が500年を越えるようなものもあり、古くから信仰の対象であったことがわかります。こうした巨樹・巨木が信仰されてきたのは、神仏を迎える目印となり、また神仏の依り代とされてきたからです。災難・災害・戦争が起らないように願い、また、安全・平和を感謝したのです。

寺院や神社だけでなく、ムラや集落の中には守り神として巨樹・巨木が聳え立っているところもしばしば観ることができます。小さな祠を設けているところもあります。農作業や山仕事を始める前に、この守り神に参集して祭事をおこなったり、日常お参りをすることも決して絶えているわけではありません。

### 無病息災を祈願：年中行事の魔除け植物

現代に受け継がれてきた年中行事はいずれもが大小の祭・宴からなっており、正月、春祭り、秋祭り、1月7日の人日（じんじつ、七草の節句）から9月9日の重陽の節句までの五節句、地鎮祭、上棟式、結婚式、葬式など実に多様です。現代社会ではこれら祭・宴にかかわる魔除け植物が忘れ去られつつあるようですが、すたれてきた祭・宴の復活とともに、必然的に蘇ってきた植物もあります。

3月3日の桃の節句では、その名の如く桃（モモ）が魔除けの主役になります。モモは弥生時代に水田稲作農耕とともに大陸からやってきた外来の植物です。中国では不老不死のパワーを秘めた植物で、桃符、桃弓などのお守りになったり、その靈力にまつわる伝説や風習は今でも絶えることはありません。弥生時代から古代にかけて、遺跡の発掘調査では頻繁にモモの核（内果皮）が確認されています。しばしば焼け焦げた核が祭祀場まら発見されますが、これは核の割れ方で吉兆を占ったものではないかと考えられます。古代の遺跡では、家を廃

絶するときに焦げた核を床に投げこんで、邪悪なものが住みつかないように魔除けをしたのです。『古事記』には黄泉の国からイザナギノミコトが逃げ帰るとき、追いかけてくる悪鬼にモモを投げつけて難を逃れたという話があります。まさに邪悪なものを追い払う魔除けであったのでしょ

7月7日の七夕(たなばた)は、現代では竹笹に願い事を書いた紙札を飾り付けて、無病息災、祈願成就を願うのがふつうですが、かつては猛暑を無事に過ごし、不老長生を願う行事でもあったのです。その主役は仙翁(センノウ)でした。センノウは七夕の花といってもいいでしょう。フシグロセンノウに近縁のナデシコ科の植物で、何とんでもその花の色が鮮やかな真紅で、花卉の切れ込みも刺激的です。まるで炎のようです。センノウは14世紀に中国から日本に持ち込まれたと考えられ、京都の仙翁寺で初めて育てられたと言われています。15世紀に入ると8月前後の3か月はこの花で賑わい、七夕前後は花束を抱えた人々が京都の街中を行き交ったと記録されています。センノウは宮中で不老長生の仙花として、また室町禅林では七夕にセンノウを送ることが定着していたようです。猛暑の暑気払いの魔除け植物であったのです。

9月9日は重陽の節句、菊の節句とも言われます。菊は日本の花とされますが、古代に中国からもたらされた外来植物で、古代から中世、近世にかけて日本独自にたくさんの品種が創り出され、近世では日本の園芸文化を代表する花となったのです。キクもモモやセンノウと同様に、不老長生の仙花とされ、菊水伝説などたくさんの伝説が中国からもたらされ、また日本独自のもも太郎伝説などが伝承されてきました。

**農事と豊作、子供の健康と成長を祈願**

冬至から小正月にかけて各地では一年の災厄を祓う魔除けの行事と豊作を祈願する予祝行事が催されます。なかでも道祖神のお祭りと呼ばれる火祭りは今でも広く残っている行事です。たとえば小正月、木で作った人形(木偶)を門口に立てるか、門柱に縄で括り付ける風習があります。オッカドボウ(御門棒)と呼んでいます、2本の棒がセットになっていて、怪しげな顔を墨で描くか彫刻を施します。家に悪い物事が到来しないように魔除けをしたのです。この棒に使われる木はカツノキと決まっていた。ウルシ科のヌルデのことです。地域によってはニワトコ、ハゼノキ、オニグルミであることもあったようです。壱岐に残っていたむくりこくりという人形もその変形でしょう。農事にかかわる魔除けには、5月の田植えの時期に稲穂に見立てたウツギの花枝が使われるなど、一年を通して実に多様です。

年中行事とも深くかかわって子供たちの健康と成長を祈願する魔除けも各地に受け継がれているものがたくさんあります。それらは近世、近代以降に山間での廃業を余儀なくされた木地師によって姿かたちを変えていったものもあります。いわゆる郷土玩具として、子供たちの健康と成長を祈願するだけでなく、旅するひとびとの安全、社会の平和を祈願するものへと変身しているのです。そんな身近なものになっていった魔除けについても考えてみることにしましょう。

.....

**次回予告** 第284回くらしの植物苑観察会 令和4年11月26日(土)  
 「菊花 江戸時代の観賞一地植え・切花・鉢植え」  
 平野 恵氏(台東区立中央図書館専門員)  
 13:30~15:30 苑内休憩所集合 申込不要 定員30名